

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	Bernanosの内面世界(univers intérieur)における一考察 : そのromanesque作品の超自然的世界の解明
Author(s)	真田, 光子
Citation	フランス文学 , 10・11 : 31 - 44
Issue Date	1969-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040897">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040897</a>
Right	
Relation	



# Bernanos の内面世界 (univers intérieur)

## における一考察

——その romanesque 作品の超自然的世界の解明——

真 田 光 子

Bernanos の内面世界はそのまま彼の romanesque 作品に投影される<sup>註1)</sup>。その内でも殊に前半第I期 (1926年～1930年) の三つの romans, “Sous le Soleil de Satan”, “L’Imposture”, “La Joie”, そして Bernanos の 凡てが凝縮された日記形式の roman, “Journal d’un Curé de Campagne” (1936年) に、最後作となった唯一の théâtre, “Dialogues des Carmélites” (1948年執筆)<sup>註2)</sup> を加えて、ここに描き出された司祭聖人達の内面に焦点を当ててみるものである。即ち偉大な俗人司祭 (prêtre laï) とも称すべき Georges Bernanos の内面世界の一面を prêtres bernanosiens, Saints bernanosiens の内面を通してのぞいてみることを主目的とするものである。しかる後 Bernanos 第二期 (1931年～1948年) 作品の世界に少し入り Bernanos 世界全体を披瀝してみよう。

Bernanos は作家であるよりも先づ catholique であった。catholicisme の中に生れ育ち、生涯教会の教えるところにとどまった<sup>註3)</sup>。この信仰とその形成された内面は、Bernanos という豊かな文学的才能を通り、現代という時代の中で、自由なロマン形式の土壌に、まことに original<sup>註4)</sup> な芸術作品となって、咲き出たのである。

さて第一期作品中の personnages を三グループに分けよう。善の偉大な魂と、悪へ落ちた偉大な魂、そして凡庸な魂達らがいる。先づ彼らのそれぞれの内面を縦に切って、その内面断面の図を取り、次ぎに横にこれらの内面が辿る生涯を見渡してみよう。

先づ善の偉大な魂即ち prêtres bernanosiens, Saints bernanosiens の内面上層部には、ただただ苦しみがあるばかりである。先づ外的試練がある。対人関係において、殊に彼ら村の司祭は教区民から受ける無関心、嘲笑、侮蔑、誤解、凡庸者らからの無理解、教会内部においては、その上長達への Jeanne d’Arc 的状況 (Position) に置かれている。即ち上長当局からうさんくさくにらまれ、辺地の不毛な教区に追放されており、そこで名実共に全くの孤独下で、一人教会権力に反抗的言動をとり増々不評を買う。同時に彼らには種々の内的試練の重圧がおしかぶされている。人間的欠陥や弱点、その故の失策失敗肉身上の苦痛、遺伝的先天的に負わされている宿命的疾患、精神的苦悩、不安や懷疑や種々の angoisse. それら現実に現われ出た試練にかたて加えて、彼らの真の苦しみ即ち誘惑の苦しみがある。不信が襲い絶望の淵に陥いれんとする。その胸中に虚無感がよぎり、自殺への思いさえ田舎司祭の脳裡をかすめる。絶望感から自己憎悪、わけても己が肉身への憎悪へと悪魔は誘い入れる。これらの誘惑への抵抗と共に、彼らは神の敵対者である悪魔に立向かわねばならない。人祖以来のこの旧敵と血まなこの苦闘が繰り返される。又世にはび

こる悪に対し罪に対し、彼らの悩みは尽きない。罪人らを救い出すための命がけの愛の業。そして彼らこそ人間の運命と、人間の条件を身に負わされ、人一倍人間の無力と限界を痛烈に感じさせられた人種である。そこへ最終的苦しき、即ち死が待機している。彼らは皆幼少より死に恐れを抱き続け<sup>5)</sup>、Géthsémani における主 Christ の Agonie に捕えられた“囚人”<sup>6)</sup>であり、いよいよの時、神からさえも見捨てられたかと思われる全くの孤絶下で、彼らも「わが神わが神なぜ私をお見捨てになったのですか」と十字架上のかの Christ の悲痛な叫びを上げるのである。罪人を救うためには彼らは、かくまでの絶望の危険を通らねばならないのである。彼ら聖人はこの至上の苦しみに価するからである<sup>7)</sup>。その死は世にも醜いもだえ苦しむ恥辱の死である。世に一般に信じられている、眠るが如き安らかな聖人の死とはおよそ異なる。

さてこれらの苦しみを背負ってゆくことは他ならぬ彼らの主 Christ の苦しみに与かってゆくこと、十字架への engagement に他ならず、これらのどの苦しみの裏にも、Christ への愛が秘めこまれている。Christ は苦難の生涯と十字架の死によって、天に対し、人に対し、全き愛を表わしたように Christ に倣う聖者らも、彼らの苦しみと死でもって、純粋に愛を行なってゆくのである。彼らは les âmes épanouies dans l'Amour<sup>8)</sup> なのである。此処に苦しみと愛は一つのものとなったのである<sup>9)</sup>。さて愛は喜びである。愛と喜びは一つのものである。では Bernanos の喜びとはいかなるものであろうか？“La Joie”と題された小説の héroïne Chantal を見てみよう。彼女は苦しみに苦しみを重ねたあげく、その最後は目も当てられぬ無惨な死を遂げて終る。即ち Bernanos の言わんとした喜びは、いかなる苦しきをも苦しんでゆけるといふことの内にあるのである。苦しむことが喜びとなるのである<sup>10)</sup> 何故なら苦しむことで Christ の苦難と死に与かり、愛を行ってゆけるのであるから。此処に苦しみと喜びも一つのものとなる。以上、苦しき・愛・喜びはそれぞれに表裏一体、そしてこの三つの精神は三位一体とも言うべき関係に互いに融け合わされたのである。この霊的内面を、神のもとへ、永遠の至福の国へと押上げてゆく絶えざる力がある。希望がそれである。この強靱な invincible espérance<sup>11)</sup> は一見ひよわい人物らに賦与されている。この“望みの女王”はいかなる絶望の嵐にも決して揺ぎはしない。幼い Chantal も、哀れな小さき田舎司祭も然り。

これら苦しき・愛・喜び・希望の四つの精神になる内面は、恩寵により生かされ élan surnaturel を見せて動く、非常に actif な世界である。そこには凄じい苦行のムチが飛び散り、脱魂現象が起り、天的喜びが注賦され、又渴き切った暗夜をも見出すのである。

次にこうした内面の辿る生涯を横に見渡してみよう。彼らは皆“<sup>おきなご</sup>幼児の心”をもっている。又名実共に彼らの多くは、年すらぬうぶな司祭とか、若い娘である。幼児とは、その無力さのどん底から、単純に信頼をもって助けを求める。こうした謙虚な心に恩寵はくだる。神の国は近いのである<sup>12)</sup>。彼らはこの追放の地より、大いなる神の王国へと帰還していくのである。その帰還の道とは、希望の道、復活の朝への Grand Rêve の道である。Bernanos は言う、希望は幼児のものだ。幼児のみがこの道を駆け登るのだと。神の子 Jé-

sus も然り。しかし、この神の子の天がけた希望の道とは、他ならず Calvaire の道、苦難と死の道であった<sup>13)</sup>。その果ては、十字架上に刑死する苦しみと恥辱の敗北の内に息絶える。それは一見、神の死、聖者の敗北、悪魔の勝利かと思われる。しかしこの時一大 Paradoxe が起る。キリスト教的超自然的 Paradoxe である。これが Bernanos 唯一の“理論”である。死の彼方に生命が甦える。聖金曜日<sup>14)</sup>の暗き悲しみの“夜の終り”に、朝明けが、新しい光の王国、幼児らの国、神の国が到来する。そこで彼らは、彼らの喜びそのものであった主 Christ を見出すであろう。この故に、Bernanos 世界は題して、A la recherche de la Joie perdue<sup>15)</sup> の苦しみから喜びへの道を描いたもの、La Joie retrouvée で締めくくられる一大 vision の世界であると言えよう。

以上に見た善の偉大な魂のグループの者とは、Bernanos 流に分けて、Saints, prêtres, héros, innocents, adolescents déçus, enfants humiliés らである。彼らは人より余計に苦しみをこらむる人種であり、単純な心で幼児のように希望し、ただ純粹に愛にのみ動かされ、真の喜びをもつ者達である。この故に彼らは Grand Rêve を抱いて生きる。これは虚しく消え果てる fantôme ではない。いつの日にか Christ に行き着く、真実の真夢なのである<sup>16)</sup>。では grand visionnaire, grand rêveur であった Georges Bernanos は、このグループの魂であったろうか？言うまでもない。上に写し出して来た内面世界はそのまま、彼らの créateur Georges Bernanos の内面そのものが投影されているのである。かの聖金曜日の雰囲気での、あまりに多き練獄的苦しみも、Christ への熾烈な愛も、苦しみを喜びとした純粹な喜びも、その invincible espérance も、又 Sainte Agonie に憑かれた彼らの辿る Calvaire の内面生涯も。上に見て来た彼らの内面世界の中に、作者 Bernanos の portrait spirituel が彷彿と浮かび出てくるのが見えるのである。

次に偉大な上質の魂を持たされながらも、その力を悪へ向け、Satan へ身売りした魂達の内面はいかなるものかのぞいてみよう。

悪の世界、此処にこそ Bernanos の本領は存分に発揮され、フランスカトリック文学中に、今までにない大胆勇壮かつ特異な悪の焔が神学的悪の形而上学<sup>17)</sup>の裏付けをもって開墾される。そこには至る所<sup>18)</sup>に悪魔の業とその跡が見られる。しかも生々しく人間化された悪魔<sup>19)</sup>、この社会を大手をふって徘徊する悪魔が。

悪と罪、即ち虚無とそれへの破壊は Bernanos 世界をくまなく塗りつぶしている。恐るべき呪われた土地に Bernanos original の悪の聖者、似而非司祭、虚無の王者らが創り出されるのである。Bernanos は人間の墮落を描いた。肉欲の墮落を契機に自殺にまで至った若い娘 Mouchette、死という人間無力の神秘の前で、神に委ねる従順ではなくして、神に問い、死んだ子供を甦らせてくれと神に挑戦的要求をし、かの墮落天使の如く神に頭をもたげ、傲慢という恐るべき“悪魔の陽の下”<sup>20)</sup>への誘惑にまんまとひっかかった Donissan 神父、信仰を失いながら聖務をつとめている偽善の似而非司祭、虚偽の承諾、虚無

への献身，それが意識的になされてゆくという，神即ち真理と実在から離れた罪人達が創り描き出される。彼らは *les âmes privées d'Amour* と呼ばれよう。これらの“悪”の偉大な魂の内面を，縦と横に見てみよう。彼らの苦しみは又ひとかたならぬ深刻性を帯びている。己が墮落や偽善の罪科の故のつきまとう恥じと怖じまどい，良心の咎め，自己への憎悪は，片時も心中から晴れることはない。この逃れ場なき精神状況に陥った魂は嘘の土壁を虚構しては，保身につとめる。即 Bernanos のいう“悪夢”に入り込むか，魔業か快楽か，さては絶望の果ての自殺或いは発狂かの道がそれぞれに与えられている。これらはすべて Satan のもたらしたおびただしい所産である。しかしこの良心の咎め，即ち一かけらであれ善への憧憬，倫理的体系汚されぬ幼年が残されてあって，この細いすき間を通して，いつの日か一筋の光明が射し入り，Christ の住まう余地があるのである。彼らは大いなる痛悔と共に救われてゆくであろう。彼らには Christ への愛がなかった。即ち真理ではなくして虚偽を愛した。悪への愛である<sup>21)</sup>。そこには自由も平安も喜びもない。Bernanos はこれを冷え凍えた氷のようであると表現する<sup>22)</sup>。そこは闇とぎし，悲しみと孤独に充満した世界である。これが Bernanos のいう地獄である。彼らはこの *mauvais rêve* の立ちこめた中で，真実からそびれそびれて，精神的墮落化，虚無化を重ね，“悪”の坂道をどんどんおりてゆく。その陥った先で目の醒め果てた時には，死の意味すらもなくした死に入り込んでいるのである。悪の本質は無なのである<sup>23)</sup>。これが亡びであり Satan との一致である。善の道を行く者は真理を生きているのであり，Christ に行き着く。神との一致である。

次にこれら大いなる善でもない，両者に股がる中間者達，即ち第三のグループの凡庸な魂達がチラチラと出没するのであるが，彼らの内面については第II期の作品に入って，俄然その大場を占めてくるこのグループの者らと一括して見てみることにする。

さて善の世界と悪の世界は，個々に分れて相対しているのであろうか。否，両者は全く相隣り合って同居しているのである。de Clergerie 家の屋根の下に，Lumbres の小さい村の中に。そこでは善と悪，神の子 Christ と Satan，恩寵と罪との闘争が凄まじく操り拵げられる<sup>24)</sup>。聖者は悪魔と格闘し，善の最後の砦たる神に立てられた司祭は，彼の教区の魂達をまもらんと狂気する。又悪魔の方はこの憎らしき大敵である聖人達に，まっこうからの誘惑の総攻撃を加えては，彼らを打ち砕かんと躍気になる。彼らの聖性は唯愛をのみ武器として，素手でこれにとび込み，敢然と立向かう。最後には善が悪を払い，神の聖者は Satan を駆逐する。この永遠の大闘争は，多くのカトリック作家達が描こうとした題材である。殊に現代にあっては Bernanos が見事にこれをえぐり出して見せた揺ぎなき第一人者なのである。

小さい見栄えのしない Artois 地方の，年中雲閉ざし，沼と泥の湿地になる小寒村に，神と Satan が相対決する。風雲はらみ稲妻を呼ぶ疾風怒濤の荒れ狂うダイナミックな“神者ベートーベン”になる，大ノクターン<sup>25)</sup>の世界に我らは引込まれる。それは又，ダンテ的地獄練獄天国の三界にかける大ドラマである。しかし最後は静かな光と平和の溢ぎるセ

レニテのうちに終焉を告げる。

この勇壮なる visionnaire, 凄じい imagination の持主, 聖なる Passion の使い手, clairvoyant の20世紀 Balzac sacerdotal<sup>26)</sup> こと Georges Bernanos は, この大 Comédie humaine であり, 同時に Comédie divine の超自然的世界を, Bernanos 自らが名づける réalisme catholique でもって描き出して見せた。これが Bernanos 特異の romanesque 世界なのである。

さて Bernanos はこうした闘争のみにとどまる人ではなかった。闘いではなくして交わりをこそ求め表わさんとしたのである。即ち“諸聖人の通功”の教義に基く世界がそれである。善の世界の司祭, 聖人, 善人達の一切の苦しみと殊に Bernanos では死の苦しみが大きいなる功德となって, 悪の世界の魂達の上に移されてゆき, 深いところで力強く働いては, 驚くべき改心や救霊の成果をあげる。Donissan 神父の異常な苦しみと死は, Mouchette を救うため<sup>27)</sup>聖徳の老司祭 Chevance と聖女 Chantal の惨い死の苦しみは, 似而非司祭 Cénabre を立直らせるために働くであろう。かの田舎司祭と伯爵夫人の間にもこの“つながり”をたぐる事が出来る。最後の作品での La Prieure の死は, Blanche のためであったと, 作者は明確に一カルメリットに証言させる。

こうした“諸聖人の通功”は, 善と悪の間にも存在するのではない。善と善の間にも, そして悪の世界内にも存在する。先づ善の世界の方を見てみよう。一人の強力な善の者は弱き者達を支えつつ神へと引連れてゆく。Chantal とその家の者達, 田舎司祭と彼の囲りの村人達らの関係にこれを見てとることが出来よう。これと反対の場合もある。凡庸であれ, 弱く小さき者らの小さき善行や苦しみが一つに結集され, 一大偉業が成されてもいく。革命の迫害下, 16人の修道女達の断頭台での殉教という偉業のかけには, 名もなき町の労働者主婦達の日々の苦しみや, 教会に群といる信者らの祈りや小さな犠牲が, この一事に吸収されて, 事は成ったのであると Bernanos は信じるのである<sup>28)</sup>。

次に悪の世界の方であるが, この中にも驚くべき緊密な“つながり”が厳然として存在する。これがもし肉眼で見えようものなら, 誰がこれに耐えようかと書き付ける。悪の連帯性, 悪の通功, 罪のつながり<sup>29)</sup>がそれである。悪とはスコラ哲学的に善の欠如なぞとは済まされぬ, ある積極的な力あるものとしてとらえられている。<sup>30)</sup> 悪は悪を誘発する。かくてすべてが貶められていく。悪の頭は Satan である。この Satan により悪の世界は勿論のこと, 善の領土内まで一つにつなぎ下へ下へと引づり降ろさんとする, 人間の力を超えたある恐るべき力がこの世を支配している。それは人祖の墮落以来続いて来ている。これは原罪の教義の教えるところである。Bernanos は catholicisme を真正面から取上げ, その教義を方正かつ独創的に使いこなした。Jésuite の Dumoulin 神父によれば, その一つとして教会の教えるところを逸脱し歪曲し, 或いは合致せぬところはないのである。

Bernanos は殊に悪の現実を身近に鋭敏に感じ取り, 臆せずしてそこを見, どぎついまのであくどさをもって生々しくこれを描き出す。こうして悪とその力を書きつけることにより, Bernanos はその内と外との, この妄想ならぬ妄想から解放されんとしたのである。

第II期の作品になると、これまでのような大型の聖人や司祭、大仰な苦しみの道をゆく偉大な魂といったものは、ひっそりと身をひそめるであろう。何故なら作者にとってこうした例外的な少数の偉大な魂は、もはやその興味をひかないのである。問題は、我々の日々の生活の舞台に出没しては去来する、凡庸な多数の魂達の方へと向っていった。前者のような魂は殆ど見当らないではないか。我々の囲りは、ただ凡庸な者達で占められているではないかと、Bernanos は晩年になるにつれて、いわばかの夢想の世界からこの現実界において立ち、大上段に構えた教義的な世界から、内と深みのある普遍的全人類的見えざる教会の考えへと脱皮してゆき、測り知られぬ深く深い神の摂理と憐みの世界へとわけ入るのである。これは他ならず作者自身の思想とその信仰の広まり深まりを示すものであり、Bernanos 後半生の内面中に、その作品中に大きくクローズ・アップされてゆくのである。ここへまで Bernanos はその司祭的眼を移し、カトリックとして問い詰めたところにこそ、Bernanos の偉大さ、Bernanos の本質が打ち出されたのである。

さて“Journal d'un Curé de Campagne”はと云うと、年代的にも内容上でも、ちょうど中間に位置するものである。此処には Bernanos のすべてが凝縮され結出して出た、芸術的にも最高の作品とみてよいであろう。

第II期、風土はあいも変わらず一寒村の小教区である。しかし今やこの舞台には *misère* のみが支配する。神は不在である。聖者も黒い衣の司祭の姿も見当らない。一見此処は神に見捨てられた土地、その摂理の及ばぬ見放された世界である。第I期では誰が誰を救ったか、どんな功德の行き来が、誰から誰に移ったかと、通功の道が手にとって見られた。あたかも当時の作者は、亡びゆく一魂が完全に救いの日を見ないでは気が気でなく、様々の手だてをもっては罪人の救いのための解決を図ってやり、最後の土壇場に来て救われたと、判を押したような結着をつけるに、あまりに性急であったが、第II期になると、かくの如きあまりにも崇高なるドタバタ騒ぎは全くもって伏せられ、通功の道は隠されてゆく。罪人らはそのあるがままで、放り出されている。しかし見方を変れば、今こそ真に Bernanos は、「諸聖人の通功」の神秘のまっただ中へ突入したのである。

この第3の凡庸な魂達の内面を、縦横に見てみよう。彼らは苦しみの意味も価値も知らぬままにそれぞれ苦しみ、未だ真の愛を知らぬ *les âmes en quête de l'Amour* であり、せいぜいちっぽけな *humanisme* 的愛情にとどまり、我が身の安泰と名声をのみ図る、小利口さと自愛心しか持合わせない。大いなる喜びとか希望なぞとは縁なき烏合の衆、追放された失樂園にさまよう民である。彼らはどこからか来て、どこへ行くのか知りも考えもしない。 *des imbéciles, médiocres, pauvres, petits gens, coupables* ら。この世界とその地は、彼らの声なき叫びとうめきに満ちているのである。夢なく希望もない彼らの、愚かではあれ咎め罰しえないその生涯の後、彼らの運命は救いか亡びか、或いは歴史の中に消えてゆくチリのようなものであるか。 *Monsieur Ouine* の救いは *oui* か *non* か *néant* かと<sup>31)</sup>、こうした永遠の大疑問符を残したままに作者は口をつぐむ。そして無言のうちに我々に問いかけてくる。これが“*Sous le Soleil de Satan*”の Bernanos が最後にとった態

度であり、意味深長な決論ならぬ決論なのである。即ち人間が人の救いをうんぬんすべきではない。ただ沈黙し人の思いも及ばぬ深く深い摂理に信頼し、正義と憐みの神にすべてを委ねようと作者は身をもって示しているのである。

しかし彼らも救われるであろう。Bernanos は一面激烈な polémiste として、凡庸を嫌い悪を摘発してやまぬ人ではあったが、他方深い憐みをたたえた満腔の同情の人であった。Bernanos は沈黙の内に語る、彼らの一見その意味も価値も知らぬかの小さい苦しみであれ、やはり Christ の生涯にまつわった苦しみに何らかで結ばれており、無意識のうちにはあっても彼らも Christ に engagement しており、悩みと苦しみの人であった Christ が、あまりに小さくはあれ小片鱗となってより広くあまねく人々の内に住まっているのであると。そして第2のグループの悪しき者達も救われる。その墮落をこそ神は彼らの救いの手段と変えて用いる。彼らの良心の咎めと痛悔というすき間を通して、Christ は彼らの中に入り込み、大いなることが行なわれる。今こそ恩寵はあざやかに勝利を占める。そして第1の善なる偉大な魂達は、この苦しむ神の子と共に働き協力することによって、自己の救いと人々の救い、そして神の救いの業を完成してゆくのである。此処に Bernanos 世界とその全宇宙は、神に救われてゆく“すべてが恩寵”(tout est grâce)の世界であると結論出来るであろう。

## 〔註〕

- 1) Son œuvre romanesque est la projection, dans le domaine de l'imagination, de son tourment intérieur. Sa peur, son angoisse, son espérance se sont incarnées en des êtres de chair dont il a peuplé un univers de Rêve. ("le Thème de la Mort dans les Romans de Bernanos" p. 15 par G. Gaucher Lettres modernes) Bernanos における le Romancier et ses personnages の関係については、勿論厳密に同一視することは、危険である。ただ明らかに見てとれる数例を挙げれば二人の Mouchette の苦悩は Bernanos のそれであり、(Bernanos, c'est Mouchette qui a la vocation Sacerdotale—Henri Ghéon—), Blanche de La Force の不安と死への恐れは、彼自身の一部であり、Olivier 少年の angoisses は彼の青年時代のものである。老司祭 Chevance の esprit d'enfance, 聖女 Chantal の不屈の希望, sœur Constance の清く澄みきった面等、作者の内面のものが project されている。
- 2) これは Gertrud von Le Fort の "Die Letzte am Schafott" を原本に Bernanos が映画シナリオに改作したものであるが、"Signification spirituelle de l'œuvre" appartenait à Bernanos との Julien Green の断定に従い、この作品にも作者 Bernanos の内面が投影されているものとして、此処で取り上げた次第である。実際にそうなのである。
- 3) "教会の Légion d'honneur" の騎士 Georges Bernanos は、一生忠誠な "教会の子"

ではあったが、不信の時代になおも不信をまくが如き、真の使命を忘れ、腐敗した教会の部分に対しては、がまんがならなかった。殊にスペイン動乱下のイスパニア教会のとった卑劣なやり方や、占領時の一部フランスカトリック達の妥協は、彼を絶望にまで誘うところであった。polémiste Bernanos のペンが火を吹いた。Bernanos は現代社会に対してしたと同じく、教会に対してもその独裁的、権力的、位階的なものに反逆するを使命とした。又偽善的な聖職者らや、穏健 (bien-pensants) で生ぬるい眠りこけ信者らは、痛烈にやり玉にあげられた。しかしこれらの批判はすべて地上の見える教会の部分にだけであって、キリストの教会やその信仰を根底から揺がす Renan のそれとは全く違う。かえってそれは教会の真のものを擁護するためであった。何故なら彼の怒りは常に真の愛より発したものであったから。しかし後年 Bernanos は、彼自身の理解の欠如していたことを認め、詫びの言葉を記す。「教会内の人間的なるものこそ、神的なのだ」と。(“La Liberté pour quoi faire?” Gallimard pp. 284-285) Bernanos は実に真の“教会の闘士”であり、教会に深く結ばれ、教会の内に生き、思索し、教会と共に苦しみ闘った人であった。

- 4) Bernanos は実に大胆勇壮な“偉大なるロマン”をフランス文学の中に持ち込んだ。その文学の特異性を幾つか挙げると、先づ中世以来消滅したかに思われ、近代には嘲笑さえされした、悪魔を登場させ人々は驚異した。しかも肉をとったかたちでもって。(cf. Dostoievski) 次に Bernanos が書いた司祭聖人は、un être intérieur, un homme de Dieu, qui re-présente le Christ であり Balzac や Mauriac の司祭らが un être social にとどまるのと比較されよう。これは新しいタイプでありあらゆる世界の文学中に於ても最も深い所をついている。「小説家は自分の作品から神と悪魔を閉め出すなら、一切を失わねばならない。」との認識をもって、自然的世界と超自然的世界の全現実を包摂する réalisme catholique の新芸術を世に問うたのである。殊にその悪の世界にこそ Bernanos の本領は存分に発揮された。彼のロマンは、悪の形而上学のロマン化なのである。このところは註20) にて詳述する。又堂々と宗教的諸問題が論じられるなどは、カトリック文学中にてても類を見ないことである。
- 5) La peur de la mort obsède chacune des créatures de Bernanos. (“le Thème de la Mort dans les Romans de Bernanos”, Lettres modernes p. 92). それはいささか偏執的にさえ思われる程である。
- 6) le prisonnier de la Sainte Agonie と curé d'Ambricourt は自分と呼ぶ。(“Journal d'un Curé de Campagne” Plon p. 248). les saints bernanosiens も Bernanos 自身も Christ の Agonie にとらえられた魂である。
- 7) les prêtres bernanosiens, les saints bernanosiens とは、Christ の représentants として登場させられている。即ち d'autres Christ なのである。Bernanos は宿願の“Vie de Jésus”をあらわさずして惜しくも歿したが、彼の諸作品から自づと、Bernanos の Christ が浮び上がってくるのではないだろうか。

- 8) V. “Le Sens de l’Amour dans les romans de Bernanos” par M. Estève. Lettres modernes p. 14. Estève は Bernanos の全 personnages を愛の観点から三つのグループに分けている。一. les âmes épanouies dans l’Amour, 二. les âmes en quête de l’Amour, 三. les âmes privées d’Amour である。普通のどの作家もこの第二のグループを描く。Mauriac も然り。さて此処で言われている愛とは Christ の愛、苦しみ死す愛であって、享樂し、生きる Stendhal の愛とは異質である。
- 9) Cet amour (amour surnaturel) implique donc l’angoisse, la souffrance et l’agonie. (“Le Sens de l’Amour dans les romans de Bernanos” par M. Estève. Lettres modernes p. 106.)
- 10) 苦しみの中の喜び、闇の中の光こそ、生粋の Bernanos である。Bernanos においてはまだ真に喜びはない。C Claudel にはより高い宗教性の中に、喜びの泉がたたえられている。
- 11) V. “Georges Bernanos ou l’invincible espérance” par G. Gaucher. La Recherche de l’Absolu (2) Plon. Bernanos の全作品は「...にも拘らず」という、キリスト教的な気分から、「不動の信仰」と、「喰いつくす希望」をもって書かれた。彼はその希望を聖者らに託した。希望は彼らに、罪に対する恩寵の、Satan に対する Christ の、悪に対する善の、闇に対する光の勝利を確信させるものである。Bernanos のドラマはこれらの絶望と希望との二つの両極の間で演じられる。この希望とは生易しいものなのではない。
- Le péché contre l’espérance—le plus mortel de tous, et peut-être le mieux accueilli, le plus caressé. (“Journal d’un Curé de Campagne”. Pléiade p. 1116). l’espérance si difficile...et si facile, それはある terreur なものであり、唯一の aventure であるとしている。
- 12) Jésus, “Laissez venir à moi les petits enfants: ne les empêchez pas, car c’est à leur pareils qu’appartient le Royaume de Dieu. En vérité je vous le dis, quiconque n’accueille pas le Royaume de Dieu en petit enfant, n’y entrera pas” (“Bible” L’Evangile selon saint Marc ch. 10 v. 14-15).
- 13) Bernanos には、よき脱出口救いの道として死、幼年、夢、希望がある。これらは死して復活した神の子ゆえに一つのものにとけ合って喜びの泉となっている。
- 14) Christ が死に、葬られた金曜日をこう呼ぶ。C Claudel がより過越 (Pascal) にいる一方、(過越とは、聖木曜日、最後の晩餐より、復活の日曜日までを言う。故に Claudel の方が復活の喜びと光に溢れていると言えるのである。) Bernanos は聖金曜日 (Vendredi Saint) と苦悶 (Agonie) にとどまっている。しかしその悲しみの墓場に一条の光は射し入っている。朝の訪れが予想されてはいるのである。
- 15) 人祖の墮落の後、罪が入りこみ、悲しみと苦しみが喜びにとって代わった。人は l’antique Paradis sur la terre, la Joie perdue, le Royaume perdu de la Joie (“M.

Ouine” Plon p. 208) に追放され、失樂園をさまよっているのである。そこで田舎司祭は言う、la mission de l’Eglise est justement de retrouver la source des joies perdues. (“Journal d’un Curé de Campagne” Plon p. 332).

16) V. “Les Romans de Georges Bernanos ou le défi du rêve” par Henri Debluë Neuchatel p. 264.

17) V. 註 19).

18) que vous ayez, ou non, vu face à face *celui que* (=Stan) nous rencontrons chaque jour—non point hélas au détour d’un Chemin, mais en nous-mêmes— (v. “Sous” Pléiade p. 223.)

悪魔たる者は凡庸な *petits cœurs, petits bouches* は問題にしない。Bernanos は殊に聖者と言われる人の心理の奥にこれを見た。Mais il (=Satan) est cependant... Il est dans l’oraison du Solitaire, dans son jeûne et sa pénitence, au creux de la plus profonde extase, et dans le silence du cœur... Il e-poisonne l’eau lustrale, il brûle dans la cire consacrée, respire dans l’haleine des vierges, déchire avec la haine et la discipline, corrompt toute voie. On l’a vu mentir sur lèvres entrouvertes pour dispenser la parole de vérité, poursuivre le juste, au milieu du tonnerre et des éclairs du ravissement béatifique, jusque dans les bras même de Dieu... Pourquoi disputerait-il tant d’hommes à la terre sur laquelle ils rampent comme des bêtes, en attendant qu’elle les recouvre demain? Ce troupeau obscur va tout seul à sa destinée... Sa haine s’est réservé les saints. (“Sous” pléiade p. 154)

「悪魔は人間のあらゆる心理を畏にしようと身構えていること、キリスト者の神に対する信仰の中にさえも偽装してひそむ場所のあること、人が聖者に近づこうとすればするほど、悪魔の陥計と誘惑とが苛烈になることなどがわかる。」と Bernanos について遠藤周作氏は述べている。(V. 「宗教と文学」南北社)

19) 悪魔の擬人化描写は所々に見ることが出来る。ある力と又もろさと、憎々しさと生々しさを賦与されているのである。

Je (=Donissan) te (=Satan) vois écrasé par ta douleur, jusqu’à la limite de l’anéantissement—qui ne te sera point accordé, ô créature suppliciée! (“Sous” Pléiade p. 179)

Le monstre (=Satan) vous (bien—pensants) regarde en riant, mais il n’a pas mis sur vous sa serre. Sa haine... (“Sous” Plon p.109) v. “Journal” Pléiade p. 1143.

断わっておかなければならないことは、Bernanos は悪魔に憑かれた如くこれをよく書いたが(又神即ち、Christ と Christ を re-présenter する司祭を、その一方でよく書いたのであるが。)それは近代悪魔主義者達 Poe, Baudelaire, Huysmans, Wildらの唯美主義的、反倫理的、反動的 diabolistes の悪魔趣味的作家とは本質的に異なるものである。Bernanos にあっては文学的遊戯とかはみじんもなく吹き払われ、

真剣そのものの取り組み方をしている。

- 20) *Soleil de Satan* とか、愛なくしての冷い好奇心、知識欲 (*libido sciendi*)、知識の悪魔とか Bernanos 中にしばしば見受けるが、これらはみな同じもの、所謂 Faust 的罪根を言っているものである。Donat O'Donnell はその “*Der Faust des Bernanos*” で、Bernanos を西欧の Faust 的文学作品の系譜に組み入れた。彼の作品中に於ける Faust 的罪の痕跡を調べ、Bernanos の悪の世界の全体像を創り上げた。凡ゆる罪の源泉となる根本悪は、「Faust 的なものの全体概念である知識欲である。」、「本来の敵は何等かの個人ではなく、悪魔の仮面である Faust 的知性である。知性こそ真に責任を負うべきものである。」、「知性の高らかな誇り、学究の精神、真理そのものに対する抽象的なソクラテス的な真理愛などは、ここでは野卑な好奇心に低下している。」と。確に半面では Donissan に於ても、「神の如く善悪を知る者とならん」とのかつて人祖を誘惑した、同じ悪魔の誘惑にかかったのである。dans son cœur candide et têtu, l'autre concupiscence s'éveille, ce délire de la connaissance qui perdit la mère (=Eva) des hommes, droite et pensive, au seuil du Bien et du Mal. Connaître pour détruire, et renouveler dans la destruction sa connaissance et son désir—ô soleil de Satan!—désir du néant recherché pour lui-même, abominable effusion du cœur! (“*Sous*” Plon p. 257) Ouine 氏に於いてもその愛なき好奇心は satanique と呼ばれ、自らをして偽神とまで名乗らせている。この種の罪根は Bernanos の描く悪の複合的な観察において確に重要なモチーフである。ブルジョワ社会の浅薄な不信仰な合理主義は憎まれ、知識を誇る学者の空虚さや、虚偽の仮面は剥がされ、その滑稽さは発かれ、その悪意は弾劾されている。他方これに対し、H. Dumoulin は虚偽を Bernanos に於ける悪の形而上学の基礎概念としている。彼によれば、「好奇心も結局においては一つの虚偽に他ならない。何となれば真理に対する奉仕を裏切り、自らの本性に不忠実となり、知識の為の知識を求める知性は、自らと疎遠になることであり、虚無に陥るからである。そして又 Bernanos にとって聖性の概念をなすものは真理であり、人格の根本的な価値も又真理であるということを考えても、虚偽が悪の世界の動かぬ大柱となっている。」(“*The Metaphysics of Evil in the Novels of Bernanos*” *Sophia* 1953 summer)

Bernanos の悪のとらえ方はあくまでも神学的に正しいのである。聖書においても、傲慢という罪が根となり、一切の罪が結果してくるとあるが、この傲慢とは即ち虚偽、虚しいことなのである。反対に謙遜とは真実なのである。七つの罪源といわれる傲慢、貪慾、邪淫、嫉妬、貪食、憤怒、怠惰、それにパウロの言う肉のおこない即ち、淫行、不潔、猥褻、偶像崇拜、魔術、憎み、あらし、嫉妬、憤り、徒党、分離、異端、そねみ、泥酔、遊蕩等これらのどれもみな虚しいことであり無に帰するもの虚偽なものとしてまとめることができよう。

- 21) Bernanos は愛を状態としてでなく *élan*、しかも超自然的 *élan* としてとらえ、これ

の向かった方向で善への愛と悪への愛があらわれてくる。それは恩寵と人間の意志のなすところである。悪への愛の élan となるものとして Bernanos はしばしば amour de soi, la haine, le goût du néant, la honte 等を取りあげている。

- 22) Mieux, mille fois mieux vaudrait pour vous la révolte et le blasphème, ...Ah! monsieur le chanoine, dans le blasphème, il y a quelque amour de Dieu, mais l'enfer que vous habitez est le plus froid. ("L'Imposture" Pléiade p. 356) と Chevanche は聖なる憤激を Cénabre に対してあげている。愛児を死に奪われ、固く神への憎しみに閉ざした伯爵夫人に向かって、田舎司祭は言う、L'enfer, madame, c'est de ne plus aimer. ...Madame, n'importe quel blasphème vaudrait mieux qu'un tel propos. Il y a, dans votre bouche, toute la dureté de l'enfer. ("Journal" Pléiade pp. 1157~1160)
- 23) Bernanos の悪についての本質直観も又、聖 Augustine に学びあくまで正しい。悪は虚無であるから、人間は悪を認識することが出来ない。悪の全き意識はこの世のものではないのである。"Journal" 中で彼は述べている。  
Le monde du Mal échappel tellement, en somme, à la prise de notre esprit! D'ailleurs, je ne réussis pas toujours à l'imaginer comme un monde, un univers. Il est, il ne sera toujours qu'une ébauche, l'ébauche d'une création hideuse, avortée, à l'extrême limite de l'être. Je pense à ces poches flasques et translucides de la mer. Qu'importe au monstre un criminel de plus ou de moins! Il dévore sur-le-champ son crime, l'incorpore à son épouvantable substance, le digère sans sortir un moment de son effrayante, de son éternelle immobilité. Mais l'historien, le moraliste, le philosophe même, ne veulent voir que le criminel, ils refont le mal à l'image et à la ressemblance de l'homme. Ils ne se forment aucune idée du mal lui-même, cette énorme aspiration du vide, du néant. ("Journal" Pléiade p. 1143)
- 24) 一見 Bernanos 世界はマニケイズムの二元論の世界のようである。しかし終局においては、神が勝利し光が闇を追い払う故に、明らかにキリスト教的恩寵観に基づく世界なのである。さてこの闘争が行なわれるのは、人間の内部においてであり、人の靈魂を賭金に二大勢力が対抗する。この故に Bernanos の描く人間は、“ひき裂かれた人間” となるのである。
- 25) un immense nocturne animé par un Beethoven «théologiques» v. "Bernanos" par Louis Chaigne Editions Universitaires, p. 25.
- 26) 彼は幼少より Balzac に読み耽った。Je veux devenir Balzac! と書付けた彼は、Balzac のような小説家になることを目当てとした。その Personnages は Balzac の Passionnés, possédés に類似する点があり、“un incendie impossible à contrôler” の如き Passion sainte, Mauriac では及びもつかぬ驚嘆すべき vision catholique réelle 湧き上り渦巻く凄じい imagination, 高き inspiration を備えた Romancier catholique

balzacien なのである。しかも真の力と lucide な真理を有する Balzac sacerdotal である。

- 27) もしこの教義が嘘のものであるなら、一切は瓦解する。Sinon, l'œuvre perd son sens et la terrible expiation du curé de Lumbres n'est plus qu'une atroce et démentielle histoire. ("Bernanos Satan et Nous" par G. Gaucher p. 128)

何かがあると信じ、隣人のために愛故の苦しみや犠牲の死を捧げてゆく、Christ を頭とするこの愛の神殿は、このつながりが抜き取られる時、一切もろとも崩壊し、その廢墟に悲痛極まるうめきとあがきが充満し、残酷な苦痛と醜い死かばねが山と積まれよう。それは兇悪作家の悪趣味以外の何ものでもなくなり、恐るべきロマネスクと変わる。

- 28) 更になおこの聖霊による通功の働きは、国家を救い、革命の嵐を鎮め、歴史を変革する力をもつと主張している。expiation universelle の考えがそれである。la mort des Seize Carmélites fut pour l'auteur non seulement un martyr mais aussi une action qui rehaussait tout la France pour laquelle les religieuses avaient offert leurs vies. 断頭台に散った sœur Blanche は、かつてのフランス救国の聖女 Jeanne d'Arc と相通じるのであり、この原理は、救世主 Jésus-Christ と人類の間にその典型を見るのである。

- 29) 悪の帝国, Satan 共同統治について Bernanos は明らかに言及する、「悪が組織化されているのを誰れが否定しえようか。我々の感覚が我々に委ねる宇宙よりさらにずっと現実的な宇宙、その不吉な風景、青白い空、冷たい太陽、冷酷な星々を持った宇宙を？それは同時に精神的であり、肉欲的である王国、途方もない密度と、ほとんど無限の重量を持ち、そのかたわらでは、地上の王国はただの形象や象徴に似てくるほどの王国なのだ。」("Les Grandes Cimetières sous la lune" Plon)

La solidarité dans le mal, voilà ce qui épouvante! Car les crimes, si atroces qu'ils puissent être, ne renseignent guère mieux sur la nature du mal que les plus hautes œuvres des saints sur la splendeur de Dieu. ("Journal" Pléiade pp 1142-1143)

功德の連帯性と同じく罪の連帯性もある。諸聖人達が人類を上へと高めてゆくものなら、罪人らの共同体はそれを下へと落しめてゆく世界である。『罪の世界はちょうど暗い深い淵に映っている景色の影のように聖寵の世界に対しているのです。聖人達の共同体があるように、罪人達の共同体もあるのです。罪人達が互いに懐きあう憎悪の中に、侮蔑の中に彼らは一つになり、抱き合い、群をなしとけ合い、永遠者の眼には、いつかあの神聖な愛の巨きな潮、渾沌を豊饒にした燃え熾る炎の海がその表面を空しく撫でてすぎる、どろりとした泥の潮にすぎなくなるでしょう。

("Journal") 勿論, grands Saints と grands pécheurs の間にもある liens mystérieux がある。Je crois que si Dieu nous donnait une idée claire de la solidarité qui nous lie les uns aux autres, dans le bien et dans le mal, nous ne pourrions plus vivre.

(“Journal”. Pléiade p. 1159. Plon p. 204).

人と人は星遊の如くかけ離れていると、愛の砂漠を書いた Mauriac ら、多くの現代作家達の、描いた人間の孤立性のさみしさの中に、Bernanos は、人間の連帯性を持ち込み対抗する。しかもそれは Christ により一つにされた人類、原罪により結ばれ合った人類という意識をもってである。

- 30) Kafka や Green や Malraux らが、神の不在と、不可能性の前に感じた人間を、彼らの言う不条理の世界だと見捨て、神の不在、神の死として表現しているあの孤独、屈辱、有罪性を、Bernanos では悪魔が人間を所有し、征服しているとして積極的に表現する。Bernanos は人間にのしかかるこの超自然の陰性反応が、あるひとつの現実的意味をもちうると感じ表現した唯一人の人間であると言えよう。
- 31) Dans son nom, on peut reconnaître l'homme qui a dit Oui au Néant. (“Bernanos” ed. Universitaires. p. 51. par Louis Chaigne) 他に rien への oui (無の承諾) と解釈する説もある。Né-réis 城という名も恐らく、無 (rien) の王者 (roi) とか、虚無 (néant) の支配 (reigne) とか取ることが出来ると思われる。

#### 主要な参考文献

- ① “Souffrance et expiation dans la pensée de Bernanos” par Bush William. Lettres Modernes, 1962.
- ② “Le Sens de l'Amour dans les Romans de Bernanos” par Michel Estève. Lettres Modernes, 1959.
- ③ “le Thème de la Mort dans les Romans de Bernanos” par Guy Gaucher. Lettres Modernes, 1955.
- ④ “Georges Bernanos ou l'invincible espérance”, par Guy Gaucher. Plon, 1962.